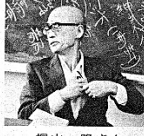


好奇心をもち皆さんの言葉に耳を

●思い出の断片をつなぎ合わせて！

今朝の読売新聞「先生のコトバ 導かれて⑤」に作家・佐藤 優さんが語る浦高の名物教師・桐山一隆先生(社会、在職期間:昭和23年~50年)の話がありました。[下記:記事PDF]

木曜日 12 S くらし 教育 18



桐山一隆さん(享年67)
元同僚・飯島英夫さん(78)談

君たちは平均的エリートです

1947年4月、桐山一隆先生は立浦高校に入学しました。桐山先生は、浦高で61歳で退職して4月、非常勤講師になった世界史の桐山一隆先生が、いさつに立ち、「君たちは平均的エリートです」と言ったのです。淡々としゃべり方でした。「特に大きい業績を残した人間もいない人間ばかり輩出しているもんだ」と話しました。浦高の生徒は、教師が「かたしな言葉をすると「シー」「シー」と声を上げてからかうこともあるのです。このときは水を打ったように静かになりました。今思えば、生徒たちが本当にそれくらいを指摘された

問題意識が明確だった

桐山先生は、1988年に70歳で亡くなった時、息子さんから「私にまじき話があり、私から浦高関係性を伝えたい」といって、浦高生のことを「小・中・高・大」まで、一生懸命に書いてくれた。彼は問題意識が明確な人であり、興味があることを、このあたりまで掘り下げていく。他人の話を聞き、自分の考えを整理し、そして自分の考えを人に伝える。これが桐山先生のスタイルだった。彼は、社会に生きる人間にとって、どのような生き方があるのか、ということを常に考えていた。そして、その考えを、自分の言葉で、人に伝える。これが、桐山先生の「問題意識が明確だった」といわれる所以だ。

好奇心もち、自分で考える

桐山先生は、3年の時、主権の勝利と敗戦に答える予備校の講師を務めた。この経験が、桐山先生に、歴史を学ぶことの重要性を教えた。彼は、歴史を学ぶことが、社会を生きる人間にとって、どのような意味があるのか、ということを常に考えていた。そして、その考えを、自分の言葉で、人に伝える。これが、桐山先生の「好奇心もち、自分で考える」といわれる所以だ。

みなさんの記憶に響く学校の先生のコトバを教えてください。住所、氏名、年齢、職業、電話番号、メールアドレスを明記し、〒100-8055読売新聞東京本社教育課「先生のコトバ」係へ。下記ファクス、メールでも受け付けます。

佐藤 優さん(30回卒)は私よりも5期下ですので、私たちの学年も当然桐山先生の授業を受けた者もいますが、私の記憶にはない(・・?)なのです。それでも桐山先生の『構造図解世界史』や『構造図解日本史』という本はなんとなく覚えています。

そして、取材に応じられた元同僚の飯島英夫先生の方が私にとっては身近な存在でした。高校2年次の担任で、教科は物理を教えてくださいました。授業は独自に作成されたさまざまなプリントを使われ、そのプリントを理解すると物事の原理が分かったような気になり好きな分野でした。そのお陰で高校時代に100点を取れたのは物理と数学だけだったような気がします。定理だとか公式というのが私の好きな世界だったのです。社会に関しては、歴史は過去を記憶するものと思っていたため、地形や気候などから産業や社会の形成をみる地理が好きでした。

社会人になって歴史小説を読むようになり、作家によって作られた人物像かも知れませんが、その時代を生きた人々の様子や考えなどを知るようになって歴史が好きになってきたかも知れません。私は高校時代から「平均的なエリート」ではなく、どちらかというと落ちこぼれにならないようにしていただけかも知れません。あの頃に、もっと幅広い分野の本を読んでおけばよかったと悔やむばかりです。

さて先日、佐藤さんの『友情について 僕と豊島昭彦君の44年』を読み終わりました。我々が就職する際に最も安定している職業と言われた銀行・日本債権銀行に入行した豊島さんの四半世紀、バブルが崩壊してからの銀行を巡る状況、外国人上司やゆうちょ銀行での官僚的組織との軋轢など、なるほどそうなんだと思いながら読ませてもらいました。

そんな中で、佐藤さんも豊島さんも高校時代のことを良く覚えてい

るんだなあ・・というのが一番の感想でした。

それというのも、私は高校生活での出来事の殆どを記憶の外に置いてきてしまったからです。ですから、今は同窓会や同期会に積極的に参加して高校時代の思い出を語る皆さんの話を伺いながら、そう言えば・・そんなことがあったのかも知れないと断片的な記憶を綴り直しています。だから、同窓会や同期会の事務局を引き受けているのかも知れませんね。

現在、「15歳で出会って50年目の同期会」を9月28日(土)に開催する予定で、7月1日に案内状を347名に送りました。まだ10日しか経っていませんが、毎日、数名から返事が返ってきています。出欠と近況を知らせてくれるメールやハガキの中から裏側に隠されている50年を垣間見することもできます。今年は皆さんに「記念文集を作りたい」と呼びかけています。どんな断片が集まるか楽しみです！ (^^)

